

長野県更埴市 栗佐遺跡群

諏訪南沖遺跡Ⅲ

—西友更埴店建設に伴う発掘調査報告書—

1996

更埴市教育委員会



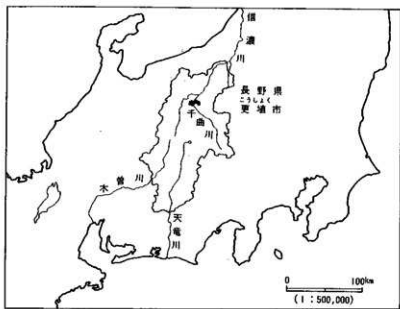
長野県更埴市 栗佐遺跡群

諏訪南沖遺跡Ⅲ

—西友更埴店建設に伴う発掘調査報告書—

1996

更埴市教育委員会



例言

目次

1 本書は、鶴エス・エス・ブイから委託を受けた更埴市教育委員会が、平成6年度から7年度に実施した店舗建設に伴う諏訪南沖遺跡発掘調査報告である。

2 本報告書の執筆は調査担当者が行った。

3 本書の写真・実測は調査担当者が行った。

4 本書中の方位は、平面直角座標系第Ⅷ系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。

5 本書の表現は下記のとおりである。

焼土  炭化物 

黒色処理  断面黒塗りは須恵器

中世陶器 

6 本調査に伴う、出土遺物・実測図・写真等の資料は、全て更埴市教育委員会が保管している。

なお、出土遺物には、諏訪南沖遺跡3次調査を略し「SMO3」と表記した。

例言・目次

第1章 調査の概要……………1

第1節 概要……………1

第2節 発掘調査に至る経過……………2

第3節 調査日誌……………2

第2章 遺跡の環境……………3

第3章 遺構と遺物……………7

第1節 奈良時代以前……………7

第2節 平安時代……………12

第3節 中世……………21

第4章 まとめ……………26

住居跡一覧表……………28

写真図版……………29

第1章 調査の概要

第1節 概 要

- 1 調査遺跡名 Abu 粟佐遺跡群 Y. Higashi 諏訪南沖遺跡 (市台帳No31-7)
- 2 所在地及び
 更埴市大字粟佐1201能
 土地所有者 更埴市大字粟佐1465-5 堀内 稔 他
- 3 原因及び事
 業 者 佛エス・エス・ブイ店舗建設工事
 業者 長野市川中島御厨石河原37 佛エス・エス・ブイ
- 4 調査内容 発掘調査 (調査面積約1,800㎡)
- 5 調査期間 平成7年3月13日～6月22日
- 6 調査費用 平成6年度 1,145,000円 全額原因者負担
 平成7年度 7,200,000円 #
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
 担当者 佐藤信之 更埴市教育委員会
 調査員 小野紀男 #
- 調査参加者 渡渡久人 大井操子 岡田栄子 金井順子 国光一穂 金田良一 久保啓子
 神戸富子 小林千春 小林昌子 小林芳白 近藤寿人 高野貞子 高沢豊延
 中村久美子 中村文恵 西沢豊重 半田公子 半田なお美 西沢広人
 宮崎恵子 宮崎志夫 村山 豊
- 事務局 安藤 敏教育長 (～平成7年9月) 下崎文義教育長 (平成7年9月～)
 下崎 巖教育次長 山崎芳之社会教育課長 下崎雅信文化係長
 岡田 勝 矢島宏雄 佐藤信之 小野紀男
- 種別・時期 集落跡 古墳時代～中世
- 遺構・遺物 古墳・奈良時代 竪穴住居跡 7棟
 平安時代 竪穴住居跡 20棟 掘立柱建物跡 1棟
 中世以降 礎石建物 1棟 竪穴状遺構 1棟
 堀 1基 溝 12基
 土坑 11基 柱穴 1000本以上
 出土遺物 土器片 コンテナ30箱

第2節 発掘調査に至る経過

平成6年10月、㈱エス・エス・ブイから栗佐地籍に店舗の建設を計画しているとの連絡があった。市では隣接する市道等の発掘調査で、集落跡が検出されていることから、発掘調査が必要であると伝えた。11月18日、試掘調査を実施した結果、建設予定地の西側で埋蔵文化財の存在が確認されたため、約1,200㎡の調査が必要になると連絡した。12月28日、㈱エス・エス・ブイと市教育委員会による協議が行われた。協議の中で、建設予定が迫っているため、調査早急に実施してほしいとの要望が出された。市教育委員会では、平成7年の3月から発掘調査を実施することとし、年度がまたがるため、調査契約は二年度に分けて締結することとした。また、建物の位置が確定できないため周辺部も含めて調査を行うこととした。

平成7年に入り、1月31日、文化財保護法第57条の届出があり、発掘調査の準備に入った。3月1日、平成6年度分の委託契約が締結され、3月13日から発掘調査に入った。4月1日、平成7年度の委託契約を締結し、発掘調査はそのまま継続し6月22日、現場における調査は完了した。

第3節 調査日誌

平成7年3月13日 発掘調査機材搬入し、重機により表土除去、作業員遣構検出始める。中世と思われる柱穴多数検出。

14日 グリッド設定、礎石建物の上部検出。

20日 北側から柱穴群の掘り下げ開始。

22日 柱穴群の実測を始める。

27日 北側の柱穴群掘り下げ完了、南側の検出に入る。

4月4日 柱穴の掘り下げがほぼ完了したため、溝の掘り下げに入る。

6日 8号溝より内耳鍋の破片多量に出土。

11日 4号溝と10号溝は同一の溝となり、方形区画となる可能性が高い。

25日 南側の4～10号溝の掘り下げが完了したため、全景写真撮影。

5月2日 南側から下層の住居跡の検出に入る。ふるさと農道の作業員加わる。

8日 中央に残っていた玉ねぎ小屋撤去し、遺構検出を行う。

10日 住居跡の掘り下げを始める。

11日 中世の遺構掘り下げ完了。

17日 礎石建物解体し下部構造を確認するか不明。

24日 10号溝の延長線上にトレンチを入れ、溝が狭くことを確認。

6月13日 重機により礎石建物付近に住居跡検出面まで下げる。

20日 ラジコンヘリにより空中撮影を行う。

22日 機材を撤収して現場における作業を完了とする。

27日 重機により埋め戻しを行う。

第2章 遺跡の環境

更埴市の中央を北流する千曲川は、善光寺平に入りその流れを大きく東へと変えており、屈曲部の両岸には広大な自然堤防が形成されている。この自然堤防は善光寺平でも特に遺跡の集中する地域であり、弥生時代から中世に至る集落跡がほとんど絶えることなく営まれている。千曲川右岸にあたる更埴市では、有明山から北西に延びる尾根である一重山を境に、東を屋代遺跡群、今回の調査地点が含まれる西を、粟佐遺跡群として把握している。長野市となる左岸では聖川を境として、東を篠ノ井遺跡群、西を塩崎遺跡群として扱っている。また、この自然堤防の後背湿地は古くから水田として利用されており、最近まで条里的地割を残していたため、長野市側は石川条里、更埴市側を更埴条里と呼んでいる。

粟佐遺跡群は、東西0.5km南北1km程の広がりを持っており、これまでに五輪堂遺跡・南沖遺跡・戸崎遺跡・北村遺跡・宮裏遺跡などの調査が行われており、約250棟の堅穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡など弥生時代終末から中世に至る遺構が多数検出されている。特に五輪堂遺跡は遺構の密度、内容からして更埴市屈指の大遺跡である。

諏訪南沖遺跡は粟佐遺跡群の北西端部に当たる。これまでに2回の調査が行われ、古墳時代中期から中世の遺構が確認されている。主体をなすのは平安時代の遺構で、集落跡から水田跡に移行する部分となる。また、今回の調査地点の南約400mには、粟狭（粟佐）神社がある。粟狭神社は延喜式に列記された神社であり、船山郷の総社であったと考えられている。

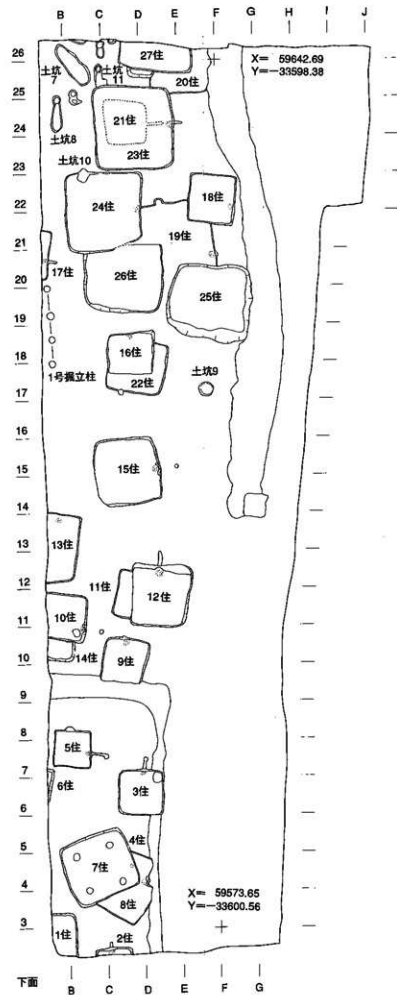
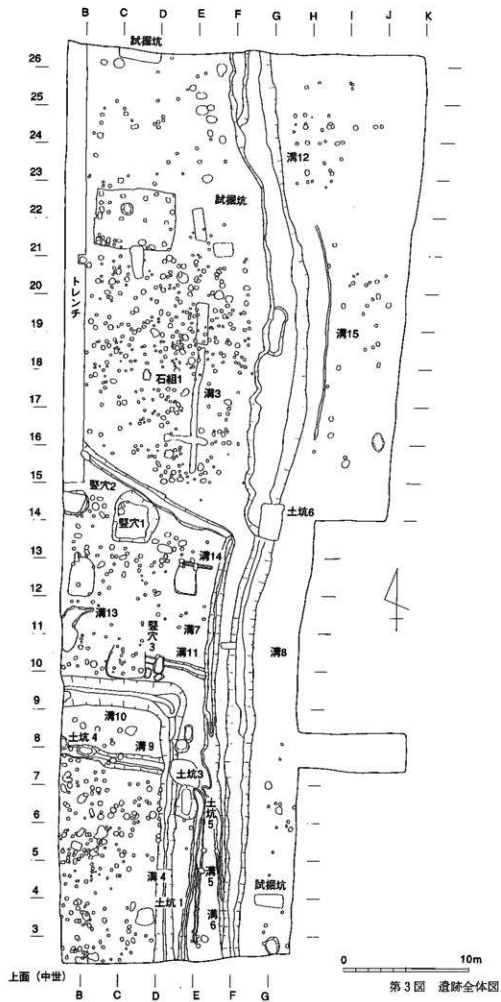


第1図 調査風景



栗佐遺跡群 1. 諏訪南沖遺跡 2. 五輪堂遺跡 3. 南沖遺跡 4. 戸崎遺跡 5. 宮裏遺跡

第2図 遺跡位置図 (1:10,000)



第3章 遺構と遺物

第1節 奈良時代以前

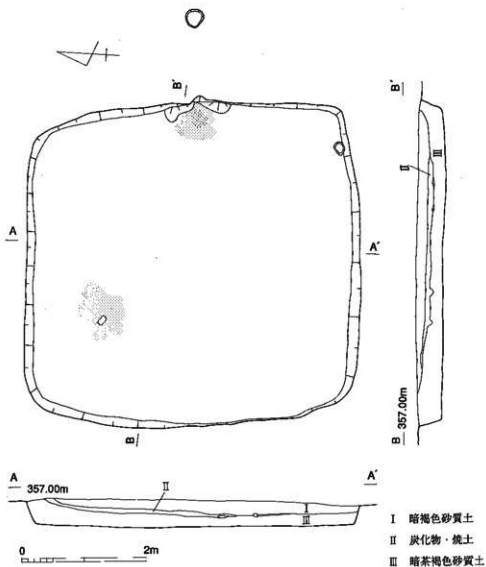
奈良時代以前の遺構は、住居跡7棟が検出されている。7号住居跡を除き調査区北側からの検出で1辺5mを超える比較的大形の住居跡となる。

15号住居跡 (第4・5図、図版1・6)

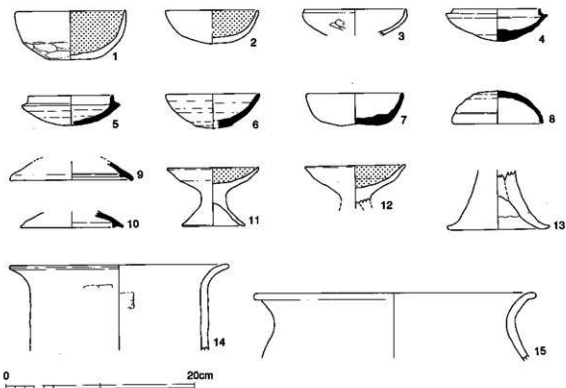
位置：B・C・D-14・15 規模：5.05×5.00m 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-85°-E

覆土：3層に分層できるが、II層は炭化物層で焼土が混入している。Iに焼けた痕跡がないため、外部から持ち込まれた物と思われる。



第4図 15号居住跡



第5図 15号居住跡出土遺物

床面：ほぼ平坦であったが、締まりはなく軟弱であった。南西部では薄く炭化物が広がっていた。

壁：立ち上がりはなだらかで最大壁高37cmを測ることができる。

カマド：東壁中央から検出されている。すでに大半が壊されており、袖の一部と煙出しが残っていた。袖は石の利用はなく粘土製で、煙出しは直径25cm程度の円形で、掘り込み7cmを検出したにすぎない。

遺物：1～3は土師器の杯で3を除き内面黒色処理が施されている。いずれも丸底で1はヘラケズリ2はナアの痕跡を良く残している。4～7は須恵器の杯で4・5口径に対して器高が小さく受部が見られる。6・7は底部にヘラオコシの痕跡を残している。8～10は杯蓋で9・10はかえりが付けられている。11～13は土師器の高杯である。脚部はいずれもハの字状に開くもので、杯部が残る11・12は内面黒色処理が施されている。全様を知ることのできる11は器高6.2cmと極めて小形である。14・15は土師器の甕で、14は口縁部に最大径を持つ長胴甕で、15はヘラミガキが施されており、胴部のやや膨らむ甕になる可能性もある。

7号住居跡（第6・7図、図版2）

位置：A・B・C-4・5 規模：5.30×4.95m 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-70°-E 新旧関係：4・8号住居跡に切られる。

覆土：2層に分層できる。上層は検出面同様の砂質で、下層は灰色を帯びた暗褐色土となる。

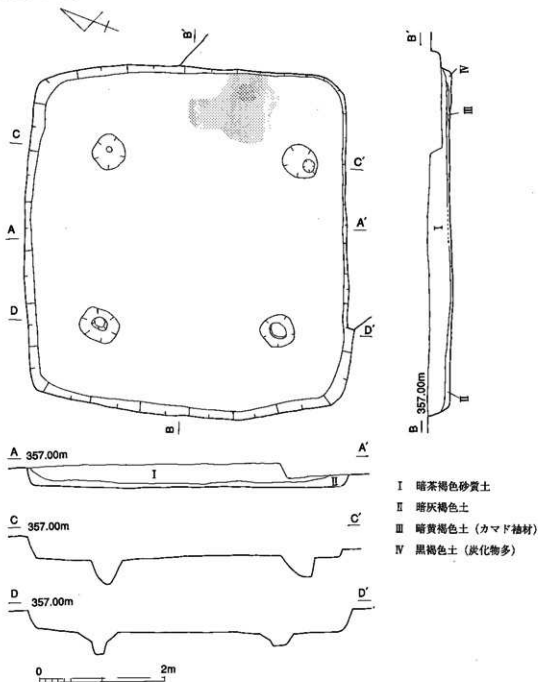
床面：ほぼ平坦であったが、締まりはなかった。

壁：南東部分が4・8号住居跡に切られているため明確ではなかったが、他の部分の検出は容易であった。立ち上がりはなだらかで、最大壁高38cmを測れる。

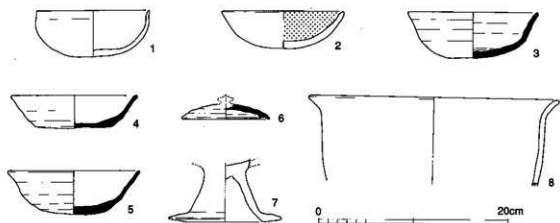
カマド：東壁南寄りに作られているが、4号住居跡構築の際壊されており、火床と周辺に広がる炭化物を抽出したにすぎない。

柱穴：主柱穴と思われる4本が検出されている。直径50cm前後の規模を持つが掘り込みは20~40cm程と浅く、明確ではなかった。

遺物：出土遺物は少ない。1・2は丸底の土師器の杯で、1は器壁が薄く2は内面黒色処理が施されている。3~5は須恵器の杯で全てヘラオコシと思われるが、3・4はナアで整えている。底部には製作時に葉状の物の上に置いた跡が残っている。体部は僅かに外反して立ち上がる。6は口径10cmに満たない須恵器の杯蓋で、断面三角形のかえりか付く。7は土師器の高杯脚部で杯部は内面黒色処理がなされている。8は土師器の鉢で荒いヘラミガキで整えている。



第6図 7号住居跡



第7図 7号住居跡出土遺物

24号住居跡 (第8・9図、図版6)

位置：B・C-21・22 規模：6.10×5.80m 平面形：隅丸方形

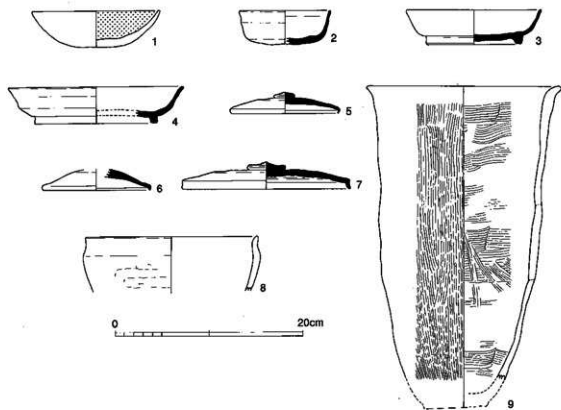
主軸方向：E 新旧関係：26号住居跡に切られる。

覆土：2層に分層できる。土質的には同一と思われるが、下層には焼土・炭化物の混入が見られる。

床面：カマド周辺は顕著であったが、他は明確に検出できなかった。

壁：西壁を除き不明確で、推定による部分もある。西壁で最大壁高20cmを測れる。

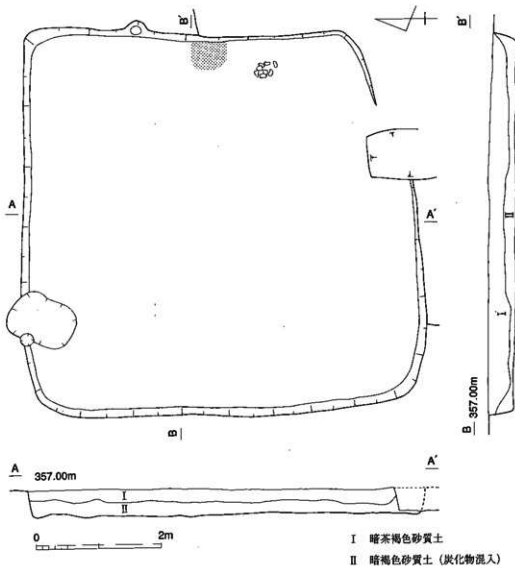
カマド：東壁中央付近から検出されているが、すでに19号住居跡により壊されており、火床を検出し



第8図 24号住居跡出土遺物

たにすぎない。

遺物：出土遺物は少ない。1はヘラミガキの施された丸底の杯で内面黒色処理されている。2～4は須恵器の杯で、2はヘラオコシの後ナデを行っており、体部は直線に立ち上がる。3・4は高台が付き、体部は3がやや内彎するのに対して4は外反している。4は口径18.5cmと大形である。5～7は須恵器の杯蓋で、口縁端部は5・6が僅かにつまみ出された形状をなすのに対して、7は嘴状となる。8は土師器の鉢、9はハケで整えた土師器の長胴甕である。



第9図 24号住居跡

第2節 平安時代

住居跡20棟、掘立柱建物跡1棟、土坑6基が検出されている。調査区内全域に広がっており、特に集中する地点などない。

3号住居跡 (第10・11図、図版2)

位置：C・D-6・7 規模：3.45×3.40m 平面形：隅丸方形

主軸方向：N 新旧関係：5号溝に切られる。

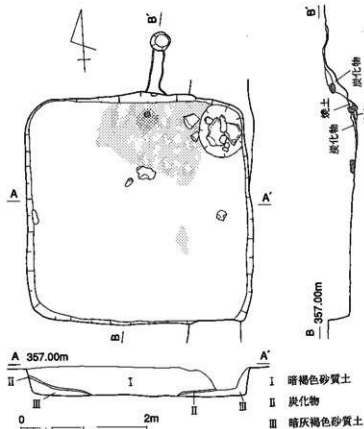
覆土：覆土中に炭化物層を挟んでいる。土に焼けた痕跡がないため、外部からの持ち込みと思われる。

床面：平坦でよく締まっている。北東隅には長径約80cm、深さ10cmの掘り込みがあり、扁平な石や長頸壺が出土している。

壁：ほぼ垂直に立ち上がっており、最大壁高45cmを測れる。

カマド：北壁中央から火床と煙道が検出されている。袖は完全に失われており、火床には支脚として利用された角礫が立てられていた。北東隅の石はカマドに使用されていた物であろう。

遺物：出土遺物は少ない。1は土師器の杯、2・3は椀でいずれも内面黒色処理が施されている。4・5は須恵器の杯で、底部は糸切り痕を残している。4の体部には「福」とも読める墨書がある。6は土師器の皿で内外面とも黒色処理が行われている。7は須恵器の長頸壺で、8・9はロクロ調整された土師器の甕である。



第10図 3号住居跡

4号住居跡

(第12・13図、図版2・6)

位置：C・D-3・4

規模：3.00m×不明

平面形：方形

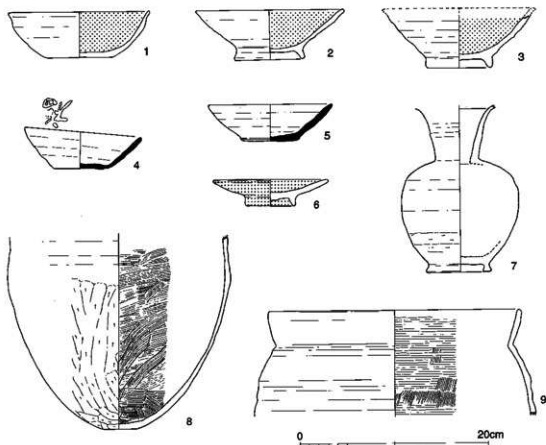
主軸方向：N-110° - E

新旧関係：5号溝に切られ、7・8号住居跡を切る。

床面：住居跡中央部分は平坦で顕著であったが、壁際は不明確であった。

壁：東壁は検出することができたが、7・8号住居跡と重なっている部分は、まったく分からなかった。東壁で壁高25cmを測ることができる。

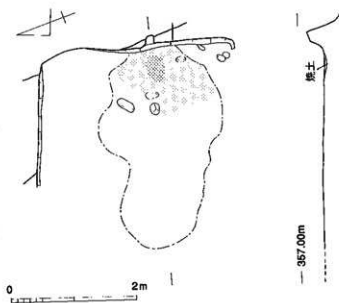
カマド：東壁中央から検出されている。ほとんど壊されており、煙道の一部と火床を検



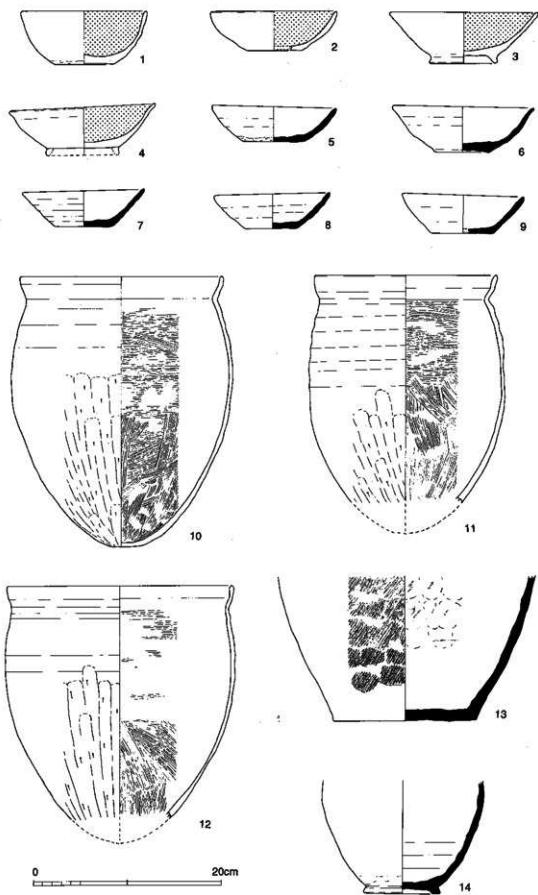
第11図 3号住居跡出土遺物

出したにすぎない。

遺物：出土遺物は多い。1・2は土師器の杯、3・4は椀ですべて内面黒色処理がなされている。1は器高が大きく底部はヘラケズリが施されている。4は高台が取れた後も使用されたらしく、周囲が摩耗している。5～9は須恵器の杯で、いずれも底部は糸切り痕を残している。体部が直線的に開くものと彎曲するもの2種がある。10～12はロクロ調整された土師器の甃で、内面は細かいハケで整え、外面は胴下半部にヘラケズリを行っている。10はヘラケズリによって底部に小さな平坦面を作っている。13・14は須恵器の甃で、13は外面を格子ふうの叩きで整えている。14は長頸壺の胴部であろう。



第12図 4号住居跡



第13图 4号住居跡出土遺物

9号住居跡 (第14・15図、図版3・7)

位置：B・C・D-9・10

規模：3.35m×不明 平面形：隅丸方形

主軸方向：N-10°-E

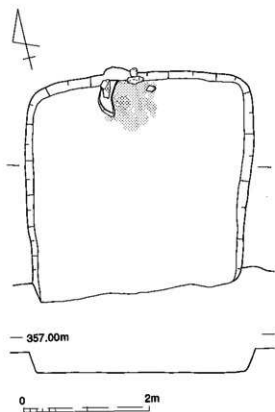
新旧関係：10号溝に切られる。

床面：平坦で良く締まっていた。特にカマド周辺及び中央部は状態が良く移植ゴテが刺さらない程であった。

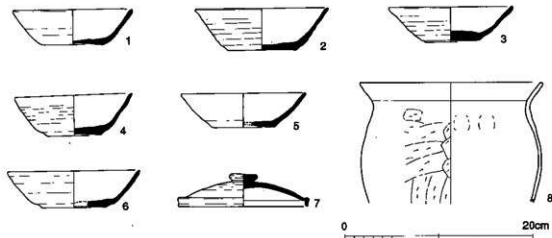
壁：明確に検出できたが、立ち上がりはなだらかであった。北東隅で最大壁高37cmを測れる。

カマド：北壁西寄りから検出されている。西側の袖は芯にされた石とそれを覆う褐色土の盛り上がりを検出したが、東側は残っていないかった。

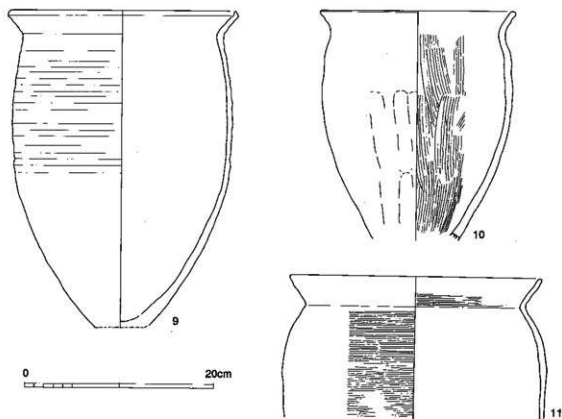
遺物：出土遺物は多かった。内面黒色処理された土師器の杯の存在も認められたが、小片で図示できなかった。1～6は須恵器の杯で、底部は糸切り痕を残しており、体部は直線的に開く。7は須恵器の杯蓋で、口唇部は小さく外反し屈曲して嘴状の端部となる。8～11は土師器の甕で、8は外面にヘラケズリを施した北武蔵型の甕である。9はロクロ調整された甕であるが胴下半部に顕著なヘラケズリは認められない。長胴で口縁端部はつまみ上げられ外面をなす。10は荒いハケとケズリに近いナデで調整されており、ロクロ調整の痕跡は認められない。11はカキ目ともいえるハケで整えている。



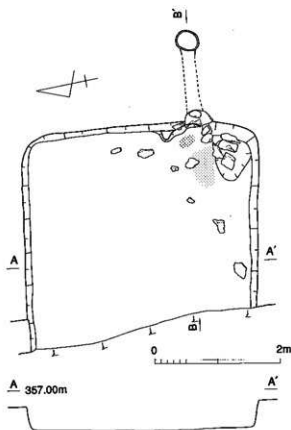
第14図 9号住居跡



第15図 9号住居跡出土遺物1



第16図 9号住居跡出土遺物2



第17図 10号住居跡

10号住居跡

(第17・18図、図版3・7)

位置：A・B-10・11

規模：3.50m×不明

平面形：方形

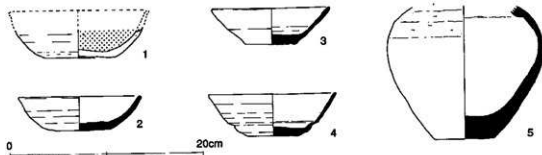
主軸方向：N-100° - E

新旧関係：14号住居跡を切る。

床面：平坦で良く締まっている。南東隅に長径70cm深さ10cmの不整形円の掘り込みがあり、遺物の多くはここから出土している。

壁：顕著で検出は容易であった。最大壁高45cmを測れる。

カマド：東壁南寄りに作られている。袖は大半が失われているが、南側は芯に利用された石が3個残っており、北側は袖状の盛り上がりだけが僅かに残っている。煙道は1.4m程延び直径



第18図 10号住居跡出土遺物

30cm程の残出しとなる。

遺物：出土遺物は少ない。1は内面黒色処理された杯で、底部はヘラケズリが施されている。2～4は須恵器の杯で底部は糸切り痕を残している。体部は2が彎曲して立ち上がるのに対して、3・4は直線的である。4の体部が屈曲するのは、糸切りの際糸が絡んだものと思われる。5は高台を持たないため、須恵器の短頸壺と思われる。

11号住居跡 (第19・20図)

位置：C・D-11・12 規模：3.55×3.40m 平面形：方形

主軸方向：N-15° - E 新旧関係：12号住居跡を切る。

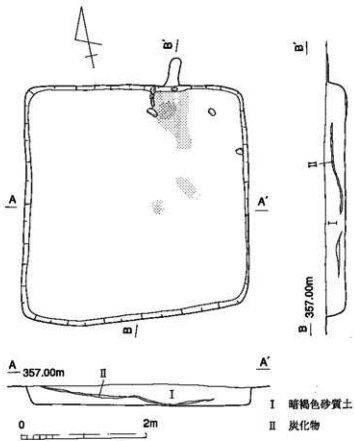
覆土：砂質の暗褐色土であったが間層として炭化物層が入っていた。

床面：平坦であったが、12号住居跡と重なっているため、明確ではなかった。

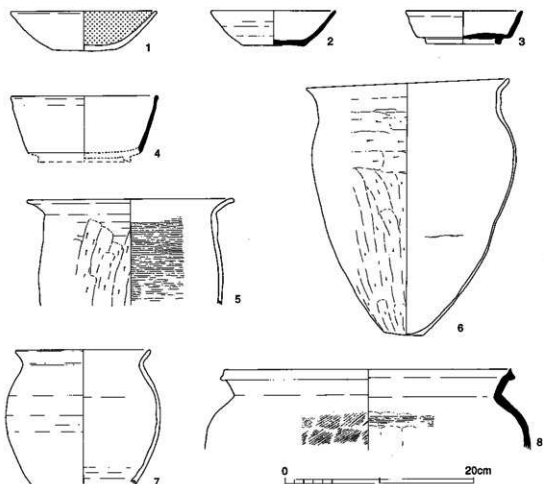
壁：西壁は明確に検出できたが、12号住居跡と切り合う東壁は一部推定となっている。検出できた壁面はなだらかな立ち上がりで、最大壁高30cmを測る。

カマド：北壁東寄りに構築されている。袖は東側はすでに失われていたが、西側は芯に利用された偏平な石が3個据えられていた。

遺物：カマドの周囲から出土している。1は内面黒色処理された土師器の杯で底部はヘラケズリが施されている。2～4は須恵器の杯で、2は糸切り痕をそのまま残し3・4は高台が付く、5～7は土師器の甕で5は



第19図 11号住居跡



第20図 11号住居跡出土遺物

口縁部が強く外反し、長胴になるものと思われる。6は北武蔵型の甕で、頭部はコの字形となる。7はロクロ成形された小型甕である。8は須恵器の甕で平行叩きで器面を整えている。

17号住居跡 (第21・22図、図版3・7)

位置：A-20・21

規模：3.90m×不明

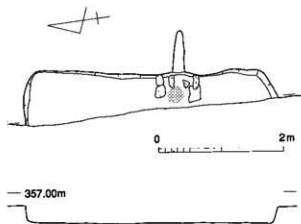
平面形：方形？

主軸方向：N-95° - E

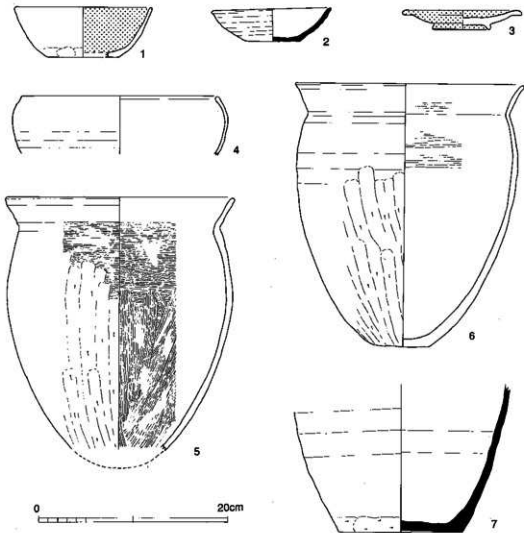
床面：西側は調査区外となるため東壁付近しか調査できなかったが、平坦で顕著であった。

壁：検出された東壁は顕著で、壁高26cmを測れる。

カマド：東壁南寄りに作られており、比較的良好的な状態で残っていた。両袖には偏平な石を2石立ており、内部にはカマドの構築に利用された石が詰っていた。煙道は70cm程延びている。



第21図 17号住居跡



第22図 17号住居跡出土遺物

遺物：出土遺物は少ないが、完形に復元できるものがある。1は内面黒色処理を施した杯で、2は底部に糸切り痕を残す須恵器の杯である。3は内外面とも黒色処理された土師器の皿で、4は鉄鉢を模倣した土師の鉢と思われる。5・6はロクロ調整された土師器の甕で、胴下半部はヘラケズリを施しており、6は平底となる。内面の調整は5が細かいハケで整えているのに対して、6はナデである。7は須恵器の壺の底部と思われる。

18号住居跡（第23・24図、図版4）

位置：E・F-22・23 規模：3.75×3.60m 平面形：方形

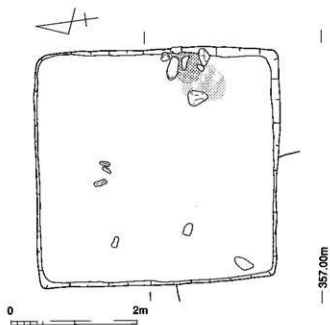
主軸方向：N-95° - E 新旧関係：19号住居跡を切る。

床面：カマド周辺は顕著であったが、壁に近付くにしたがって、不明確となる。

壁：19号住居跡と重なっている部分は明確でなかったが、他は明確であった。

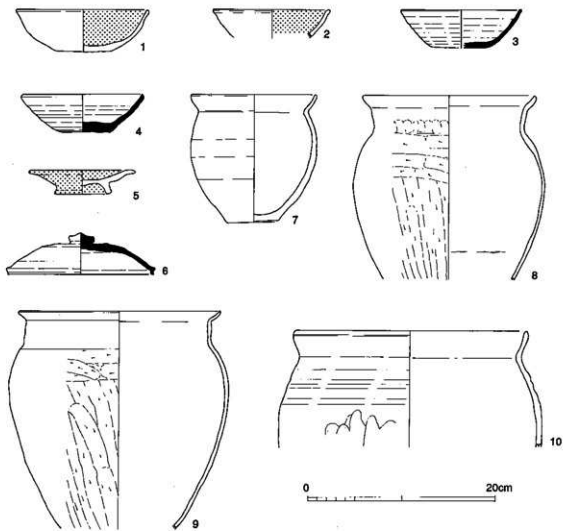
カマド：東壁南寄りに作られている。袖は芯に角礫と河原石を利用しており、内部には甕（9）が落ち込んでいた。

遺物：カマドの周辺からまとまって出土している。1・2は内面黒色処理された杯で、1の底部は糸切りの後ヘラケズリが施されている。3・4は須恵器の杯で底部は糸切り痕を残しており、体部はや



第23図 18号住居跡

や彎曲して立ち上がる。5は内外面とも黒色処理された土師器の杯で、6は須恵器の杯蓋で器高が大きい。7~10は土師器の甕で、7はロクロ調整された小型甕である。8・9はヘラケズリで器面を薄く仕上げた北武藏甕で頸部はコの字型となる。10はロクロ調整されており、胴下半はヘラケズリを行っている。



第24図 18号住居跡出土遺物

第3節 中世

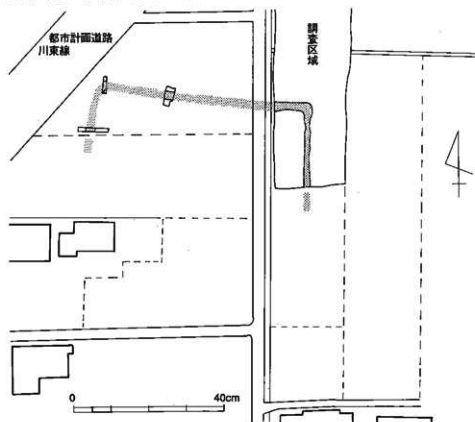
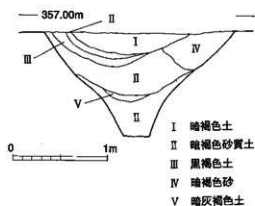
中世の遺構が存在することを確認していない状態で調査を開始したが、礎石建物跡が検出されたため、重機による掘り下げを浅くして中世遺構の確認を行った。検出された遺構は、礎石建物1棟、竪穴状遺構1基、溝12基、土坑11基、柱穴1000本以上がある。柱穴には底に平石を礎板として敷いたものも見られ、何棟かの建物があったことは想像できるが、柱の並びを確認することができず、その位置や規模を明らかにすることはできなかった。

4号・10号溝(堀) (第25・26図、図版5)

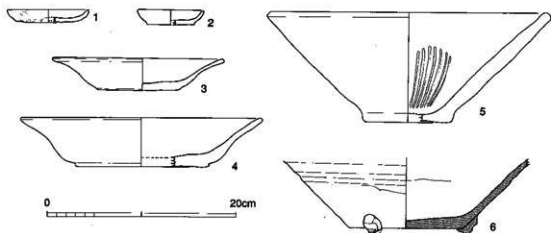
位置：D-2～9・A～C-9 幅：1.4～2.6m

構造：4号溝と10号溝は幅が異なるため、当初別々の溝と考え調査を進めたが、D-9グリッド付近で直角に折れ曲る同一の溝であることがわかった。そのため、方形区画となる堀を想定し、調査区外に3ヶ所に試掘坑を設定して規模の確認を行った。その結果、南北方向については買取地域外となるため確認できなかったが、4号溝に平行する溝を西側60m地点に確認した。したがって、1辺60mの方形区画の堀が想定できる。掘り込みは10号溝とした北側で深さ110cm、幅2m、東側で深さ90cm幅1.4mを測

断面形：V字形



第25図 4・10号溝断面図及び平面図



第26図 4・10号溝出土遺物

れ、両者ともV字型に掘り込んでいた。また、試掘坑により確認した西側の溝は、幅は2.6mと広いが深さは30cm程と浅いものであった。いずれも覆土は砂質で、自然堆積であった。

遺物：土器皿・内耳鍋・陶磁器などがあるが、出土量は少ない。土器皿は、いわゆる「かわらけ」で、1は器面に指圧痕を顕著に残しており、煤が付着している。2はロクロ成形され底部に糸切りの痕跡を残している。3は口径が18cmと大型で口縁部が大きく外反する。4は土器皿と同質の皿で口径24.5cmを測る。5は瓦質の摺り鉢である。内耳鍋は小片で出土も僅かである。6は古瀬戸の大皿で底部には三足が付けられている。この他常滑の甕・珠洲系の摺り鉢などの破片が見られる。出土陶器から14世紀後半から15世紀前半が与えられる。

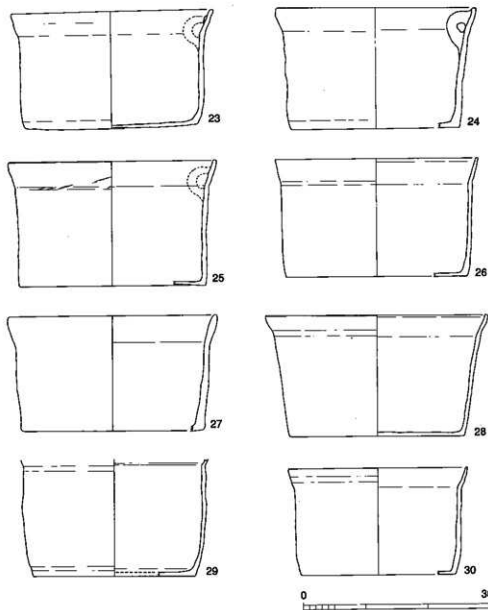
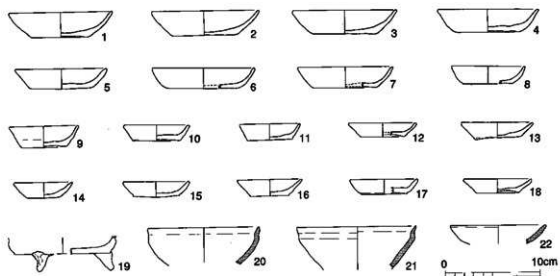
8号・12号溝 (第27・28図、図版5・7・8)

位置：E-G-2~26 **幅：**1.4~3.5m **断面形：**浅いU字形

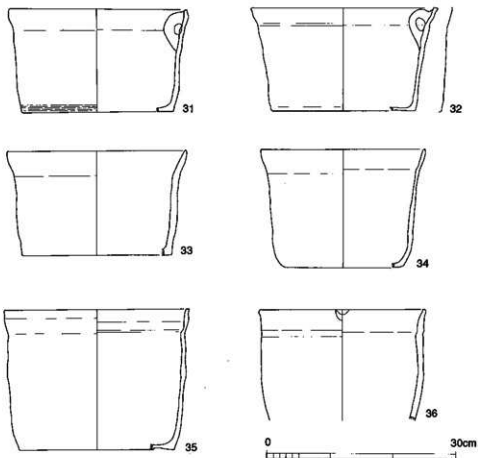
構造：調査区東側を南北に縦断する溝で、この溝を境に東側では、中世の柱穴が少なくなる。中央部の擾乱から南側を8号溝、北側を12号溝としたが、遺物の出土状態などを見ると、12号溝では中央部分にのみ遺物が集中しており、12号溝埋込後、同じ位置に8号溝が南から続いて掘り込まれていたものと思われる。しかし、土層観察からは明確に判断できなかった。8号溝の底部には砂が堆積しており、水の流れたと思われるが、12号溝にはそうした痕跡は認められなかった。

遺物：出土遺物は多く、土器皿・内耳鍋・陶磁器・五輪塔・凹石・金属器などがある。土器皿は、すべてロクロ成形され底部に糸切りの痕跡を残している。口径10~11.5cmとなる1~7と、8cm以下の8~18に大別できる。19は三脚を持つ土師質の土器で香炉形になるものと思われる。内耳鍋の出土は多く、少なくとも数十個体以上あるものと思われる。ほぼ完全に復元できたものを見ると、口縁はいずれも耳間に長軸を持つ楕円形となっている。おそらく耳を取り付ける際、器面が押されたためと思われる。形態的には口縁部をくの字状に外反させるもので、口唇端部は丸みを持つものと平坦面をなすものが見られるが後者が圧倒的に多い。陶磁器は青磁碗・天目茶碗・古瀬戸丸皿・珠洲系の摺り鉢などがあるが出土は極僅かである。五輪塔は地輪・水輪・火輪の部分が出土している。いずれも安山岩製である。金属器は全て鉄器であるが、用途の分かるものはない。出土遺物から14世紀後半から15世紀前半が考えられる。

その他は1・3・7号溝はガラスの瓶の破片などが出土していることから、明治以降のものと思わ



第27图 8·12号溝出土遺物 1



第28図 8・12号溝出土遺物2

れる。また、2・9・15号溝は中世と考えられるが、他は出土遺物から判断することはできない。

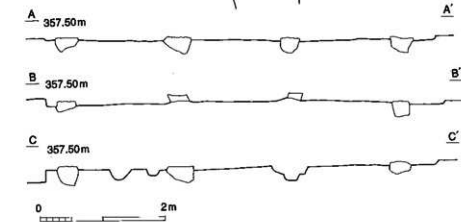
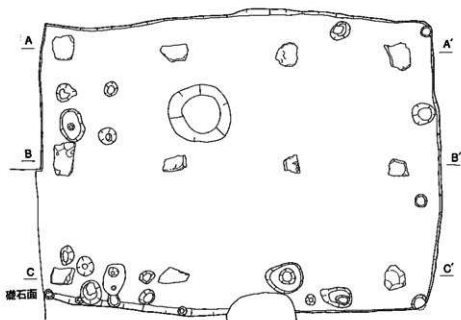
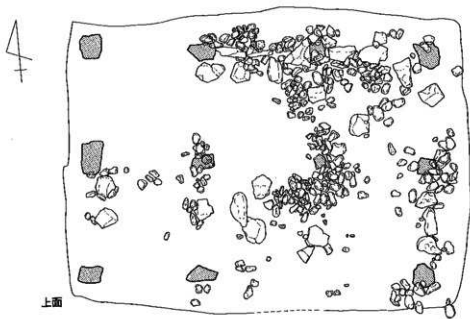
礎石建物跡 (第29図、図版5)

位置：B・C・D-21・22 **規模**：3間×2間 (5.80×3.60m) **平面形**：方形

長軸方向：N-84°-W

構造：表土下30cm程から、30～40cm角の石が集中する部分が検出された。比較的残りのいい東側と北側では、礎石の内側から、小口を外側に向け1段に並べたと思われる状態で検出されている。内部には握り拳大の川原石が敷き詰められた部分が残っており、これらを取り除くと礎石が検出された。礎石は30～40cmの角礫を、平坦面を上にして埋設し、梁行2間、桁行3間に配置しているが、南側には抜き取られた部分もある。柱間は礎石の中心で正確に180cmを測ることができる。また礎石の高低差は最大6cmとはほぼ水平であった。中央部には東柱の礎石が2つ周囲の礎石より約10cm高く設置されている。

遺物：遺構に直接関係すると思われる遺物の出土はないが、南東隅付近から永樂通寶が3点、紹定通寶1点、元祐通寶1点不明4点の9枚が重なって出土している。



第29図 礎石建物跡

第4章 まとめ

諏訪南沖遺跡は、粟佐遺跡群の北西端部にあたり、これまでに2回の調査が行われている。いずれも道路建設に伴う調査であったため、幅10m前後の限られた範囲の調査であったが、今回の調査は比較的規模の大きな調査であり、遺跡の性格の一端をつかむことができた。以下注目される点について触れまとめたい。

試掘調査では、その存在を確認できなかった中世の遺構が多数検出されている。1,000本を超える柱穴は、限られた調査期間内で建物としての配列を確認することはできなかったが、柱穴内に石の礎板を持つものが多数含まれており、かなりの数の建物が、ある程度の期間存在したことが想定される。また、これらの建物は8・12号溝の西側に集中しており、北側は小さな段丘となるため北側に広がることは考えにくい。したがって、集中の中心は調査区の西側100m程のごく限られた範囲に広がるものと思われる。

検出された溝のうち、7基はその出土物から中世の遺構と判断できる。この内4・10号溝は調査区西側の駐車場となる部分に設定した3か所のトレンチから、一辺約60mの方形区画となる可能性を指摘でき、出土物から14世紀後半から15世紀前半が与えられる。同様の方形区画は、これまでに市内で3遺跡確認されている。いずれも厩代遺跡群内であり、荒井遺跡では発掘調査で一辺約60mとなることが確認されており、大城遺跡では発掘調査と現地地形から100m程の区画が想定されている。また生仁遺跡でも発掘調査で85m以上の方形区画の存在を窺わせる。その他にも、城内遺跡では堀と思われる複数の溝が検出されており、その数はさらに増えるものと思われる。これらの方形区画となる溝は、居館跡(城)と考えられており、15世紀を中心とした時代が与えられている。事実これらの遺跡の周辺には城(館)に関係する地名や伝承が残っているが、諏訪南沖遺跡周辺では、そうした地名を見出すことはない。また溝の幅も厩代遺跡群のものは、4m以上あるのに対して、今回検出されたものは広い部分でも2.5m程で、狭い側は約1.4mしかない。防衛的な性格を考えれば、その機能を十分果たすとは考えにくい。宗教的施設の周りに堀を巡らす例なども知られており、遺構の性格は資料の増加、あるいは周辺の調査が進むのを待たないとも明らかにはならないが、中世を考える上で大きな問題提起となろう。

8号・12号溝を中心に内耳鍋が多数出土している。溝の所でも触れたように口縁部の平面形が楕円形となるものが多いため、底部から2cm程上がった部分を計測すると、29cmと24cm前後に集中する傾向が見られ、大・小2種が存在した可能性がある。形態的には深底の鍋型になるものに限られ、口辺部を「く」の字状に外反させるもので、今までの研究成果から15世紀前半が与えられる。今回の調査でも出土陶磁器からはほぼ同様の結果が得られている。ただ、体部が底部直上で内湾するものが見られより古い様相とも考えられる。

内耳鍋に対して、土器皿など食器類の出土が極端に少ない。特に厩代城に見られるような口径が12cmを超える大形のものはほとんどない。遺跡の性格とも考えられるが、食器類における木製品の普及を推測させる。

礎石建物跡はその構築年代を明らかにすることはできなかったが、柱穴群を壊して作られているこ

とから、15世紀以降の構築である。地元ではこの礎石建物が検出された水田を『スワノミヤ』、道路をはさんで西側を『オコジ』あるいは『オコジン』と呼称していたとのことであり、調査地の字は諏訪宮沖である。また、調査地南約400mにある栗狹神社の縁起等を記録した『みそぎ會』（昭和3年発行）によれば、古米、栗狹神社から丑の方田圃の中に、諏訪大明神と三寶荒神の社があったが、栗狹神社内に合併されたと記載されている。礎石建物跡は栗狹神社から見れば北北東にあたり、丑の方向となることから、諏訪大明神を祭った社と考えるとまず間違いない。ただ元禄年間（1695-1704）の松代領内寺社領書上帳には諏訪社のみが登録されており、宝暦9年（1733）の松代領神社書上には栗狹神社諏訪大明神と記している。

現在の栗狹神社は延喜式神名帳に記載された地科郡内5社の内の1社とされ、その位置も原初のままと考えられている。当時の主祭神は分らないが、現在は建御名方命であり、諏訪社と言うことになる。享保年間（1716-1736）に御柱奉納が行われたとの記録もあり、松代領内寺社領書に記載された諏訪社とは、現在の栗狹神社を指すものと思われる。上記したとおり、今回検出された礎石建物跡も諏訪社と考えられ、両者の関係は興味深い。しかし、栗狹神社本来の主祭神は何であったのか、また諏訪社と思われる礎石建物跡が合併された時期が不明であり、現段階では明らかにできない。

今回の調査では27棟の竪穴住居跡が検出されている。この内7棟は検出の少ない7世紀から8世紀にかけての住居跡であり、量的には少ないが良好な資料を得ることができた。

7号・15号・24号住居跡の遺物を比較すると、土師器の杯はいずれも偏球状で大きな変化は見られないが、15号住居跡に比べ7号・24号住居跡のものは口径が大きい。須恵器の杯も同様の傾向があり15号住居跡には受部を持つものが含まれているが、他の住居跡では見られない。また、7号住居跡には高台を持つものが含まれている。須恵器の蓋は、15号住居跡では偏球状でつまみを持たないものが含まれており、15号・7号住居跡には、かえりを持つものがあるが、24号住居跡では消滅し、変わって扁平で口縁端部が屈曲するものが出現する。

これらの変化から15号住居跡→7号住居跡→24号住居跡へと変遷をたどることができる。そして須恵器の変化から15号住居跡は7世紀後半、7号住居跡は7世紀終末から8世紀初頭、24号住居跡は8世紀初頭から前半が考えられる。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を頂いた株式会社エス・エス・ブイならびに地権者の皆様には厚く御礼申し上げます。

引用参考文献

みそぎ會 『みそぎ會』 1928

更級埴科地方誌刊行会 『更級埴科地方誌』第2巻 1978

更埴市教育委員会 『更埴市埋蔵文化財調査報告』 1990

更埴市教育委員会 『屋代城跡範囲確認調査報告書』 1996

住居跡一覽表

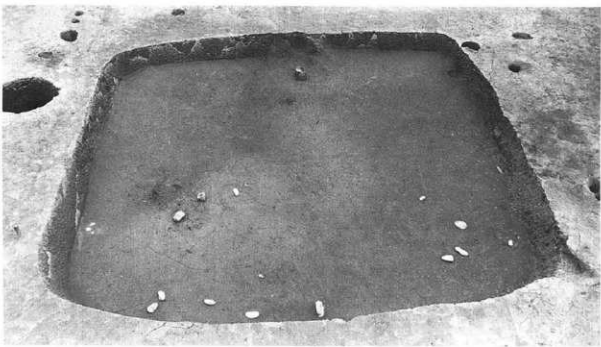
住居跡 No	時代	形態	規模 (m)	主軸方向 (長軸)	主な出土遺物	備考
1	平安	方形	不明	N	武藏甕・須惠高台杯	南側・西側調査区外
2	平安	方形	2.70×	N-10°-E	須惠蓋	南側調査区外
3	平安?	隅丸方形	3.45×3.40	N	須惠蓋・長胴甕	溝5<古
4	平安	方形	3.00×	N-110°-E	詳細本文中	7・8住<新
5	平安	方形	2.85×2.80	N-95°-E	須惠杯・小型甕	
6	平安	方形	不明	不明	須惠高台杯・内黒杯	西側調査区外
7	古墳	隅丸方形	5.30×4.95	N-70°-E	詳細本文中	4・8住<古
8	平安	方形	不明	不明	長胴甕	4住<古 8住<新
9	平安	隅丸方形	3.35×	N-10°-E	詳細本文中	溝10<古
10	平安	方形	3.50×	N-100°-W	詳細本文中	14住<新
11	平安	方形	3.55×3.40	N-15°-E	詳細本文中	12住<新
12	奈良	隅丸方形	4.30×4.20	N-5°-E	土師長胴甕・武藏甕	11住<古
13	平安?	方形	5.30×	N-10°-E	武藏甕	西側調査区外
14	平安	隅丸方形	不明	N-95°-E	須惠蓋・内黒杯	10住<古
15	古墳	隅丸方形	5.05×5.00	N-85°-E	詳細本文中	
16	平安	方形	3.50×3.00	N	須惠蓋・内黒杯	22住<新
17	平安	方形?	3.90×	N-95°-E	詳細本文中	西側調査区外
18	平安	方形	3.75×3.60	N-95°-E	詳細本文中	19住<新
19	平安	方形	不明	N-80°-E	武藏甕・内黒杯	18・25住<古
20	平安	隅丸方形	不明	E	須惠杯・武藏甕	23・27住<新
21	平安	隅丸方形	3.15×3.10	E	須惠杯・長胴甕	23住<新
22	奈良	隅丸方形	4.50×4.25	N-100°-E	須惠杯・須惠高台杯	16住<古
23	古墳	隅丸方形	6.45×6.00	N-85°-E	長胴甕・内黒高杯	21住<古
24	奈良	隅丸方形	6.10×5.80	E	詳細本文中	26住<古
25	古墳	隅丸方形	5.95×4.95	不明	内黒椀	19住<新 カマド無し
26	平安	隅丸方形	6.00×5.25	N	須惠杯・武藏甕	24住<古
27	平安	方形	5.45×	不明	須惠杯・須惠長頸壺	20住<古 北側調査区外



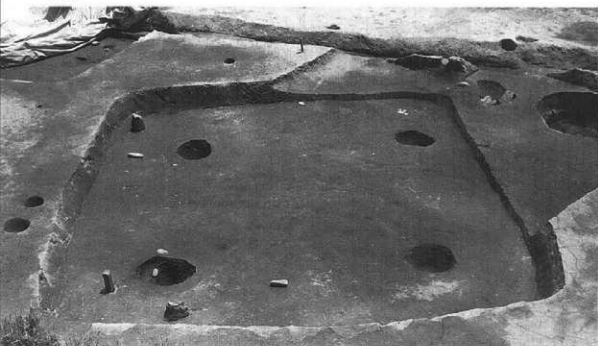
調査区遠景
北西側より



調査区全景



15号住居跡
南側より



7号住居跡
南西側より



3号住居跡
南側より



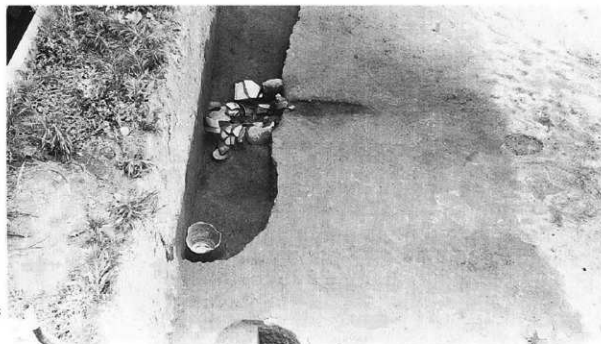
4号住居跡
西側より



9号住居跡
南側より



10号住居跡
西側より



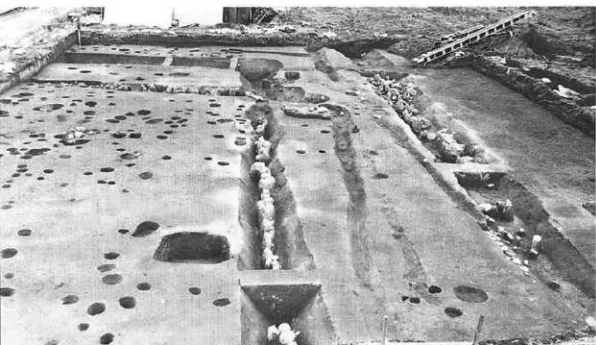
17号住居跡
南側より



18号住居跡
西側より



中世柱穴群北側
南側より



中世柱穴群南側
南側より



4号~10号溝
南側より



礎石建物跡土面
南側より



礎石建物跡
南側より

15号住居跡出土遺物



1



4



5



7



11



13



8

24号住居跡出土遺物



2



3



5



7

4号住居跡出土遺物



1



3



4



5



6



7



8



9



10



11

9号住居跡出土遺物



2



4



7

10号住居跡出土遺物



9



2



4

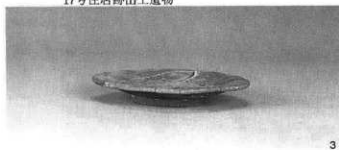


3



5

17号住居跡出土遺物



3



6



5



7

8号・12号住居跡出土遺物



1



3



5



6



8



9



10



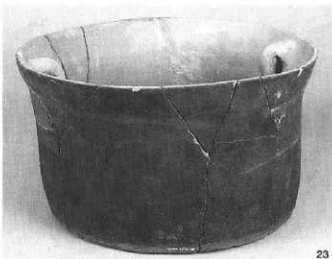
11



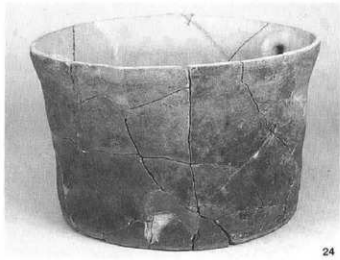
15



18



23



24



25



27



32



31



33

報告書抄録

ふりがな	すわみなみおきいせき 3						
書名	諏訪南沖遺跡 III						
副書名	西友更埴店建設に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	佐藤信之						
編集機関	更埴市教育委員会 社会教育課 文化係						
所在地	〒387 長野県更埴市杭瀬下84					TEL026-273-1111	
発行年月日	1996年3月29日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
諏訪南沖	長野県 更埴市 大字粟佐	20216 28-9	36度 32分 13秒	138度 7分 28秒	19950317 ～ 19950622	1,800	働エス・エス・ ブイ店舗建設 に伴う発掘調 査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
諏訪南沖	集落跡 城館跡	古墳・奈良 時代 平安時代 中世以降	竪穴住居 7棟	竪穴住居 20棟 竪立柱建物 1棟	土師器、須恵器、 陶器、内耳土器、 石器		
			堀 1基 礎石建物 1基 竪穴遺構 1基 溝 12基 柱穴 1000本以上				

諏訪南沖遺跡Ⅲ—西友更埴店建設に伴う発掘調査報告書—

発行日 平成 8 年 3 月 29 日

編 集 更埴市教育委員会

発 行 更埴市教育委員会

〒387 長野県更埴市大字抗瀬下84番地

T E L (026) 273-1111

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381 長野市西和田470

T E L (026) 243-2105
